

ナショナルアイデンティティーと

ニューカマー児童・生徒のアイデンティティー・文化

ーニューカマー児童生徒を教える教員へのインタビュー調査ー

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター 高橋史子

1. 目的

本研究の目的は、東京都および神奈川県の一部の公立小中学校にてニューカマー生徒を教える教師が、どのような「日本人」像を持ち、ニューカマー児童・生徒のアイデンティティーや文化についてどのような考え・期待を持っているか、両者がどのように結びついているかを明らかにすることである。2013年に行われた国際比較調査 ISSP (International Social Survey Program) では、社会に複数の民族グループが存在する場合に、「それぞれが固有の慣習や伝統を守っていくのがよい」という意見が「数の多いほうのグループに合わせるのがよい」という意見を大きく上回る結果となったのはいわゆる経済先進国の中で日本のみであった。本報告では、日常的に外国籍児童・生徒を教えている教師に着目し、教師たちの多文化への態度とナショナルアイデンティティーとの関係の分析を通じて、日本における「多文化共生」意識に関する考察を試みる。

2. 方法

東京都および神奈川県川崎市の公立小中学校（夜間中学校含む）で、外国籍児童・生徒に対して日本語を担当する教師、外国籍児童・生徒が在籍するクラスの担当教員らにインタビューを行った。インタビュー対象となった学校は14校、教員は24名である。在籍する児童生徒（本人または親）の出身国は、中国・フィリピン・タイ・インドネシア・バングラデシュ等々多岐にわたる。質問は、「日本人」らしさとは何か、担当クラスのニューカマー児童生徒のアイデンティティーや文化に対する期待や考えとその理由について問うものである。

3. 結果

ナショナルアイデンティティーに関しては、市民権主義的 (civic)・民族的・文化的な「日本人」像という3つの類型に分けることができた。それぞれの「日本人」像を持つ教師について、ニューカマー児童・生徒のアイデンティティーや文化に対する考えをまとめると、欧米で発展した多文化主義のように、市民権主義的ナショナルアイデンティティーを前提とした多文化維持の主張 (①) だけでなく、民族主義的または文化主義的なナショナルアイデンティティーを前提とした多文化維持を主張 (それぞれ②、③) も存在することがわかった。

4. 結論

上記結果の①は、マイノリティーが独自の文化を維持しつつ、政治的な意味での「日本人」や「◎◎系日本人」（例 中国系日本人やブラジル系日本人など）になることが想定可能であるが、②と③の場合には「日本人」はそれぞれ血統主義的・文化主義的に定義されており、マイノリティーが「日本人」になることは期待されず、独自のアイデンティティーと文化を維持することが期待されている。②と③は、多文化主義というよりも分離主義 (separation) に近いものであると言える。

ISSP 2013 で、日本が他国に比べて多文化維持の主張が圧倒的に多かったのは、①～③にみられるような多様な意味合いの多文化維持の主張が混在しているからであり、これは日本の「多文化共生」意識の特徴の一つであると考えられる。

文献

Kikuko Nagayoshi, 2011, "Support of Multiculturalism, but for Whom? Effects of Ethno-National Identity on the endorsement of Multiculturalism in Japan.", *Journal of Ethnic and Migration Studies*, Vol.37, Issue 4, 561-578.

高橋史子, 2016, 「「文化」の適応と維持からみる日本型多文化共生社会ーニューカマー児童・生徒を教える教師へのインタビュー調査ー」, 『異文化間教育』第44号